

原野の開拓で歩んだ人生

茨城県 金井 繁

一 海外移住の動機

私は昭和七（一九三二）年八月二十二日、現在は北朝鮮である朝鮮江原道平康郡平康面鴨洞里で父寿一、母しげのの長男として生を受けた。以来、昭和二十年八月十五日の終戦までは、平和な恵まれた時代を過ごすことができた。

予期しなかった日本の敗戦によって、営々と十八年間にわたって築き上げた故郷を無条件で明け渡し、まさしく裸一貫で日本内地に引き揚げ、現在の神戸市に生きる道を選んだ。

父寿一は、明治三十六（一九〇三）年十二月十八日、愛知県渥美半島の真ん中辺りに当たる渥美郡神戸村大草の農家の、八人兄弟の下から三番目に生まれた。一番上と五番目が女の子で、二番目の長男喜一伯父さんが家を継いだ。三番目の喜太

郎伯父さんは、国鉄の蒸気機関車の機関士になった。元気なころにはよく蒸気機関車の話を楽しく聞かせてもらったものだった。四番目の小三郎伯父さんは、昔よく家で何事かがあったようなときには、本家の片腕となり相談相手になるように、近くに住まわせていた。愛知県では新家と言って、本家もこの新家を大事に育てたものだ。

大役を仰せつかった機転の利く兄さんだった、と僕が子供のころ父からよく聞かされた。一番目と五番目の伯母さんは、どちらも渥美半島内の農家に嫁がれて、幸せな家庭を築かれた。六番目の父は、田原町にあった成章中学校（現在の成章高校）を卒業後、家業の農業を手伝っていた。父が元気なころによく聞かされたが、アルゼンチンの太平洋への移住を本気で考えた時代があったらしい。その血をひいたのか、代が変わって僕の弟、三男行彦が昭和三十四年ブラジルに移住した。

日本のデンマークと言われた愛知県安城農業学校の初代校長、山崎延吉先生の講演会が近くで開

催され、それを熱心に聴講した父は、昭和二年、茨城県内原に開校した日本国民高等学校に、七番目の鉄一叔父さんと八番目の亦造叔父さんと兄弟三人で入校して、初代校長加藤完治先生の教えを一年間受けた。このことが、海外移住の決定的な動機となった。

昭和二十年の終戦まで、朝鮮半島は十三道が一つの民族で成り立っていたのに、終戦後不幸にして北緯三十八度線を境に北朝鮮と韓国になった。

二 平康の開拓

昭和の初期、昭和七年に始まった試験的な満州移民で、朝鮮半島の中ほど朝鮮江原道平康郡平康と朝鮮江原道淮陽郡新興里に、農村青年の移住開拓が同時に進められた。

京城（ソウル）から元山に通ずる京元線の沿線、平康駅から東に約四キロメートルの平康面にある五百町歩の一団地、北側に高さ二百メートルほどの岩の塊の多い山が東西に横たわっていて、東の方を虎岩山と称していた。その南側には、火山岩

の地表点石の多い原野が展開していた。

昭和三年四月、中村孝二郎先生に引率されて父を先遣班長に、鉄一叔父さん、亦造叔父さん、その後茨城県の長岡に入植された茨城県出身の内田さんが、最初の踏査をした。

昭和三年五月から、山形県の自治講習所の修了生を中核に、茨城県内原の日本国民高等学校で開拓者講習を受けた農村青年が続いて入植して、一軒当たり五ヘクタールの自作農家百戸の建設を目標にした。

開拓地の建設資金調達と組織の必要性があつて平康産業組合を創立して、父が終戦による組合の解散まで組合長の重責を全うすることができた。

これには、組合員の一致団結した協力は言うまでもなく、開拓地指導に終始献身的に労を惜しまれなかった、中村孝二郎先生を忘れてはならない。

僕の母は愛知県渥美郡田原町大久保の農家の出身で、父中泉代三郎と母満つえの長女で、明治四十一年十二月十五日に生まれ、田原町の女学校を

卒業後、父と同じ日本国民高等学校で一年間勉強したことが縁となって、昭和五年に結婚し、以来十六年間の朝鮮での生活を体験することになった。

三 石造りの家の建築

人間が生きていくうえでの三大要素、衣食住のうち住は、その地方で手っ取り早く早く入手できる建築材を利用するのが最良である、と昔から言われているそうだが、父もいろいろ検討した結果、耕地の造成に甚だしく障害となっていた現地の自然石を活用して、これを壁体にした石造りの家を建築することにした。

組合の事務を手伝っていた毛筆の達者な土田さんが、引き揚げて来てから、自作の名句「渡る雁如何に百戸の石の家」を色紙にしたためて贈って下さったことがあった。

その当時、朝鮮には実に便利な暖房方法があった。温突オンドルと言って、竈かまどで焚き木を使って煮炊きをして、その余熱が床下を通って床を暖めるもので、寒い地方の生活の知恵である。この温突を真

似して石の家に造った。

作業場、物置、家畜舎などは、丸太材を利用した掘建て小屋をそれぞれ手造りした。組合員の家では、田畑を耕作するための役牛か役馬を飼って蓄力利用をしていた。そのころ、馬を盗まれたという話は聞かなかったが、牛泥棒はいたらしく、朝、餌をやりに行ったら牛がいなくて「組合長さん！ 夕べ牛が盗まれました」と、血相を変えて届けにみえたことが時々あった。山羊や綿羊も飼っていて、山羊の乳をよく飲んだものだった。「乳を搾ってこい」と言われると、玉蜀黍の身を古い鍋に入れて持って行って、山羊が夢中でそれを食べている間に大急ぎで搾るのだった。多少のゴミが入っていても、その辺にある布巾でこして沸かした。それがまた楽しいことだった。綿羊はどこの家でも五頭ぐらいいは飼っていた。僕の家にも、多いときは十頭ぐらいいいた。幸い裏に山があったので、春から秋までは毎日放牧をしていた。羊毛は、一年に一回刈って売っていた。時々屠殺して

肉を食べたが、その毛皮はなめし革にして敷物にした。寒い冬に備えて、極めて簡単な原始的な道具を使って毛を糸にして、手袋、靴下、セーター、襟巻きなど、一生懸命母が作ってくれた。

このような加工技術は、すべて茨城県内原の日本国民高等学校女子部（現在の日本農業実践学園）で勉強したことを、開拓地での生活に活用していたのだった。

四 朝鮮狼による被害

組合内で、緬羊が狼に狙われる被害が続いたときがあった。我が家でも、大雪の夜、一晚に三頭が運動場に引きずり出され腹をえぐられた。積もった雪の上が一面鮮血に染まり、見るも無惨な状態であった。狼は相手の内臓を好んでいて、先に食べるらしい。朝発見してあまりの悲惨な状態に憤慨して、組合内で狼退治の話が盛り上がった。六つの部落のうち、被害のあった三部落の人の緬羊小屋で、不寝番をすることになった。猟銃を持った一部落の吉村さんとその他二人、組合長は金

庫から拳銃を持ち出して待機した。一日目は何ごとも無く、二日目の夜中に現れた。吉村さんの放った猟銃が手ごたえがあったらしいので、その後周囲を探したが、死骸は見つからなかったそうだ。その後、狼の被害は途絶えた。一匹狼だったのだろうかと思った。

五 水稻栽培の確立

平康産業組合の、主な生産物としては、種々検討された結果、水稻栽培を確立することになった。水稻栽培に不可欠な水は、開拓地の北の方を流れる漢灘川から機械揚水して、道水路を経て開拓地の西に造成した貯水池に貯水しておいて、五月の田植えの時期から利用する方をとった。その当時は、田植えから刈取りまでほとんど手作業だったため、周辺の朝鮮の人たちを大勢頼んで作業を進めた。田植えが終わったときと、刈り取り収穫が終わったとき、部落ごとに集まって共同作業場で餅を搗いて会食するのが楽しみであった。

平康産業組合で生産する米は、年々生産量が増

して品質が良かったので、仁川港の米穀移出業者が競って買い取る状態にまでなった。この成果は、東北地方の庄内米や村山米の米どころの組合員が多かったせいであろう。

六 鎮守さまの建立

二部落から、組合事務所の中間の緩やかな山中腹の参道を登って鳥居をくぐると、平らな境内があつて、その奥に十段ぐらいの階段が上がった所に、平康産業組合の立派な鎮守様弥栄神社を建立した。参道には玉砂利を敷き、両側には唐松や五葉松を植栽して、昭和二十年ごろには莊厳な神社になつていた。学校からの帰りには、脱帽・直立して最敬礼をして通つた。

一年に二回、組合員家族総出で行う盛大なお祭りがあつた。その年の五穀豊穰を祈願しての「春のお祭り」、そして実りの秋が終わつての「収穫感謝祭」であつた。このお祭りのときの神主は、組合長の父が務めていた。祭事ときは、助手が必要なため、三日ぐらい前から組合員の方がみえ

て練習をしていた。父は神主の勉強に、京城の南山にあつた朝鮮神宮に行つて勉強してきた。お祭りのときは、一時間ほどの式典があつて、参列者全員整列して直立していた。神主の「オー」の発声で神様をお迎えして始まり、「オー」の発声で式典が終わるので、子供のころはほっとしたものである。午後は、子供も大人も相撲大会や棒押し大会などがあつて、盛況だつた。昭和十九年だつたと思うが「銃剣術」を行つたときには、軍隊経験の方がいて迫力があつた。昼は神社の山で豚汁を作つて食べた。ある年のお祭りでは、僕の家を三頭寄付した。ところが、間もなく三頭共山を降りて逃げ帰つて来た。寿命があつたんだというので、別の緬羊を代わりに提供したことがあつた。身代わりになつた緬羊は気の毒なことで災難であつた。

昭和二十年八月三十一日、ここを逃げ出したときに、残された緬羊たちはその後どうしたんだろうかと思うことがある。平康の秋は早い、それで

もまだ山には草は豊富にあったはずだから、山に全部放してやれば良かったのだが、そんなことを考える余裕はなかった。

七 平康旭国民学校

平康産業組合の僕たちの通った国民学校は、平康の町にあった朝鮮人だけの小学校を通り越して、京元線を西に平康駅の次の駅がある福溪の町の入り口にあった。日本人だけの学校で、小学校六年の次に高等科一年、二年とあった。産業組合の生徒が三割から四割を占めていた。通学距離が約八キロメートル、一年生から高等科二年生まで全員歩いて通っていた。片道二時間ほどかかるので、登下校時、特に冬季、吹雪のときなどは大変だった。

僕が四年生のときだったと思うが、雪の日、姉と弟と三人で話し合いがまとまって、途中から家に引き返した。帰り着いてほっとしていたところ、母が三人を引き連れて再び学校に向かった。学校に着いて教室の引き戸を開けて、授業中の先生に

深々とお辞儀をして放り込まれた。母が三人を各教室に放り込んで、家に帰り着いたのは、多分お昼を過ぎていたことだろう。このことは、生涯僕の脳裏から忘れ去ることはできない。

夏の大雨のときには、大した雨具もないので下半身ずぶ濡れで学校に着くと、よく絞って体温で自然に乾かしたものだ。寒い地方でもあり、学校が遠くて行き帰りの厳しさはあったが、子供のころにはそれほど苦痛には感じなかった。

八 弥栄国民学校

平康産業組合の児童数が次第に増えてきて、新設校の申請が許可になった。

昭和二十年四月、弥栄国民学校が開校して、長い間お世話になった平康旭国民学校から、産業組合の生徒約百人ほどが転校した。落合校長先生、角川先生、山田先生など、男の先生三人、そして女の三澤先生と四人の先生が赴任してみえた。

開校はしたけれど校舎はまだ無く、机も無く、二部落の大きな二つの収納舎を教室にして、土間

に筵を敷いて正座かあぐらをかいて、膝の上か筵の上に教科書やノートを置いての読み書きであった。

僕の家から学校までの距離は、わずか五百メートルくらいになった。担任の先生は、師範学校を出たての几帳面な山田敏夫先生になった。戦時中の物資の不足から教科書も全員には無かった。それでも楽しい新しい学校の始まりだった。

戦闘機や軍艦の燃料に使われるとかいうことで、松の根や枝の切り株集めをした。合間を使って芸会の発表もあった。先生の指導で「金井君は二部落の高橋隆助君と相談して剣舞をやりなさい」と言われて、高橋君が吟じて僕が剣舞をやることになった。出し物は「斎藤監物作詞、児島高德櫻樹に書するの図に題す」で、吟も剣舞も山田先生が一生懸命に指導してくださった。

元気の良かった高橋君のお父さんは、残念なことに南方で戦死をされた。

九 空襲

昭和二十年六月には、平康にも初めて空襲があった。その日は朝から、亦造叔父さんの田圃に弟の明雄と除草機押しの手伝いに行っていた。叔父さんと三人で、のんびりと横一列に並んで除草機を押ししていたら、西の平康駅の方から東に向かって、ちょうど僕たちの真上を飛行機が飛んで来た。高度は約五十メートルぐらい。続いて四機が左に旋回して、開拓地の北側東西に横たわる山を、上昇しながら飛び越えて福溪の方に飛び去った。間もなく、また同じコースに現れて旋回してきた。一機目の翼のマークが、下から見ると、「日の丸」だと思っていたら、これは星だった、アメリカの飛行機だった。続いて二機目。「バリバリピューンピューン」と激しい機銃掃射。左横腹から連続して出る弾が飛んで行くのが、肉眼でもはっきり見えた。狙いは、二部落の西の山の麓にある結核療養所らしい。これを工場と間違えていたのではないのか。いつの間にか三人とも恐ろしくなったのか、そばの土手の草むらに身を隠していた。

目的を終えたB24は、悠々と空母かサイパンの基地に帰ったことだろう。本州を横断してここまで来るとは思いもしなかったが、それでも日本が負けるとは思ってもいなかった。

それからは授業どころではなくなって、防空壕掘りや避難訓練に明け暮れた。防空頭巾と称して、綿を入れて頭にすっぽりかぶり、顔だけを出す帽子を常に持つようになった。そのころになると、女の子たちは皆もんべ姿になった。敵兵が上陸してきたときにこれで突き殺すんだと言って、櫛の木で作った銃の形をした木銃で突く練習が始まった。窓ガラスやガラス戸のガラスには、縦横、斜めと三センチメートルぐらいの幅の紙を貼って、爆風でガラスが飛び散らないようにした。部屋の照明には黒い筒状の布を被せて、明かりが外に漏れないようにもした。

八月六日、広島に新型といわれた爆弾が投下され、続いて長崎にも投下された。それによる被害は、無差別でしかも惨憺たる状態であるというこ

とを、ラジオのニュースで知った。八月九日にはソ連軍が満州、朝鮮、樺太に侵攻を開始したという情報を聞いた。

十 玉音放送、そして終戦

八月十五日正午、天皇陛下、御自ら全国の国民に、ラジオを通して終戦の玉音放送をされた。その日、我が家のラジオの調子が悪かったのか電波のせいかわからない大切なことを記憶しているが、忘れてはならない大切なことは、「堪え難きを堪え忍び難きを忍び以って万世の為に太平を開かむと欲す……」昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃から、三年八カ月に及ぶ大東亜戦争は、昭和二十年八月十五日、日本の無条件降伏によって終戦を迎えることになった。この大戦によって、戦勝国も敗戦国も共に多くの尊い命を失い、大変な犠牲を払った。

十一 平康からの脱出

終戦になって、だれしもほっとしたことは同感でしょう。しかし敗戦国民です。これから先、ど

んな状況になるのか全く予想ができなかった。朝鮮半島は南から米軍、北からソ連軍が進駐して、北緯三十八度線で二分された。

八月十六日から、組合事務所では毎日朝から晩まで各部落の代表が集まって、今後の対応について話し合っていた。戦国時代の小説が好きだった母は、負け戦をやった者の惨めさをよく知っていた。組合事務所と住まいが一緒になっていた関係から、母は時々男の人たちが相談している所に行つて、「早く逃げなければ大変なことになるよ」と言つて口出ししては、父に「女が口出しするな」と怒られていた。

平康駅からも、終戦直後はこれが南に行く最後の列車になるからと言つて知らせてくれたが、間もなく自由にならなくなった。決断できないまま経過するうちに、遂にソ連兵が現れるようになった。腰に拳銃、肩に銃を掛けていた。一メートルぐらいの銃身の脇に曲線のケースが付いていて、三十発ぐらい弾が並んでいた。正式な名称は知ら

なかったが、僕たちは「マンドリン銃」と言っていた。この武装したソ連兵に朝鮮人が二十人ぐらい家来のようについて来て、勝手に土足で家の中に入りしていたことがあった。出入りした跡を見ると、いろんな物が無くなっていた。情報によると、最初に進駐して来たソ連兵は囚人兵だと言われていた。頭は丸坊主で、軍服も破れて汚れたものを着ていた。

八月も終わりになる日の十九時ごろ、家族で雑談していたら、突然組合事務所の入り口から、ソ連兵が三人土足のままで廊下伝いに侵入して来て、部屋の入口で中腰で手の平を下に向けて軽く上下させながら、落ち着けと言わんばかりの手振りをした。仏壇と神棚を凝視していたが間もなく立ち去ったので、一同は胸を撫で下ろした。そのころには、日中でもうかつに女の人たちは外出できなくなつた。男の人も手出しは禁物で、絶対無抵抗主義を貫かなければ犬死に終わることになった。

終戦から二週間が経過し、八月も終わりになつ

て遂に決断しなければならぬときを迎えた。足掛十八年の歳月を掛けて、努力と汗の結晶で築き上げた五百町歩の天地、平康産業組合の基盤を、そっくり明け渡さなければならぬ組合員の心境は、筆舌には表せないものがあつたことだろう。

八月三十一日、組合の最南端に位置していた第五部落に全員が集合することになった。このとき、平康駅から一番近い第二部落の北川さんが、組合長に「私はここに残りたいから」と申し出た。

昼ごろまでに、ほとんどの人が集合して、夕方には全員そろつた。暗くなつてきて、これからどうするか話し合いがあつたが、不幸な出来事に遭遇するのなら、「集団自決をするか？」という意見も出たらしい。このことは、その後父から聞かされた。結論としては、とにかく南へ向かつて徒歩避難することに決まつた。前後して、北川さんが私も一緒に行かせて下さい、と腕を吊つて来られた。北川さんの話によると、数人のソ連兵が、北川さんに拳銃を突きつけて組合事務所を案内さ

せて、金庫を開けることができなかつたからか、開けても空だつたからか不明だけれども、頭にきたソ連兵が拳銃をぶつ放し、それが腕に当たつて重傷を負つた。当たり所によっては、命を落とすところであつた。

それにしても、父と私たち家族があと数時間、組合事務所から逃げ出すのが遅かつたら、大変な事態に遭遇していただろう。

住み慣れた故郷である平康産業組合の五部落をあとにして南に向かつて歩き出したのは、夜中になつてからだつた。在郷軍人の人たちは招集されていて、父親不在の家族が大勢あつたが、母親と子供たちは必死だつた。夜通し歩いて、夜が明け、前に山中に入って休んだ。皆を休ませておいて、その間に父と元気の良い男の人三、四人で、次に歩く道を偵察して来た。父は抜群の健脚だつたから良いが、一緒に行動した人は、さぞかし大変だつたであろう。皆が山を出て歩き始めるのは、暗くなつてからにした。四、五日は星空が綺麗で、

北極星や北斗七星が鮮明に見えて、方角が分かって良かった。

最初の一日か二日はみんな元気よく歩いたが、次第に疲れが出てきて、行列の進み方が遅くなり、所構わず座り込んで居眠りをしていた。

避難開始から七日か八日が経過したころ、遂に雨になった。雨足が強くずぶ濡れになったが、現地の人たちの好意で公会堂に休ませてもらうことができて、濡れた着物を乾かすことができた。

十日ぐらい経過したように思うある朝、雨の中を北緯三十八度線の北、漣川の山道を通行中、遠くの方で威嚇のような発砲音が聞こえた。間もなく三人の保安隊員が、日本軍から押収したのだらう三八式歩兵銃を向けて、行列の前をさえぎった。「この先の橋は通行禁止になっている。そこから南には行けないので俺たちについて来い」と言い、また「安全に南に送ってやる」とも言った。私は行列の先頭にいたので、そのやりとりをつぶさに聞いていた。あとから分かったことだが、三十八

度線通過はそんな簡単なものではなかった。

そうしているうちに、組合三部落の土木工事に来ていた土方の親分、島さん夫婦が、行列から抜けて右側の道をさっさと行ってしまった。その後、島夫妻がどうなったのか、無事に三十八度線を越えることができたのかは不明だ。

私たちは保安隊員に連れられて三、四十分歩いたような気がする。そのうちに広い学校の講堂に収容された。雨露のしのげる所であれば、板の間でも申し分の無いことだった。

その晩、暗くなつてから朝鮮人の男の人が教壇に立って演説を始めた。何を言っているのか、私には難しくて理解できなかったが、日本人を批判している内容であることは分かった。その晩は皆、疲れきっていて、そのままごろ寝をした。

翌日、近くに綺麗な流れの川があつて洗濯もできた。

その翌日だったように思うが、午前中に漣川駅から、周囲に五十センチメートルくらいの高さの

枠が付いた無蓋の貨車に全員乗って座らせられた。このとき、別の避難民も大勢いたような気がする。朝から南に送ってもらえることを、だれ一人疑うことも無く、安心しきっていた。しばらくして貨車が動き出したが、方向は南ではなく、北に向かって走っているようだった。話によると、北からの避難民を乗せて一緒に南に送る予定らしい。相変わらずもつともらしい情報を信じ込んでいた。

貨物列車は、どんどん北に向かって走って、なんと平康駅に停車したが、そこも通り越して次の福溪駅の一駅か二駅行った所でしばらく停車した。なぜここで停車しているのか、避難民を乗せるわけでもなく理由が分からなかったが、そこから折り返して南へ走り出した。

結局、また漣川駅まで戻ってきた。下ろす気配も無く、そのまま貨車の上で寝た。翌朝、父の所に保安隊員が来て、「ソ連軍幹部の酌婦をさせるのに女を出せ！」と言ってきたので、父は主だった人を集めて話したらしい。しかし、だれも無言

の中にも自分の女房を出しましょう、などということになるわけが無い。父は、間もなく迎えに来た保安隊員に、目を据えて断つたらしい。覚悟の上での対応であった。保安隊員は引き下がっては行つたが、しばらくして女の人の泣き叫ぶ声が聞こえた。別のグループから無理やり連行した様子だった。

同じ日のこと、あれから六十年余り経過した今でも、鮮明に私の脳裏に映し出されることがあった。前日、漣川の駅で同じ無蓋貨車に、山田先生は東側の西の位置に、私は西側の南の位置に座っていた。ぎっしりと身動きができない状態に座らせられていたが、そこへ私の前、東側の南の角から、保安隊員らしき青年が無理やり乗り込んで来た。その態度に対して先生の表情が顔に出たのでしようか、偶然視線が合つて、その青年が無理やり座っている人たちを押しつけて、いきなり頼に平手打ちをした。山田先生は無言で堪えていた。

貨物列車は南には行けず、北に向かって所々の

駅で停車はするが、人を下ろす気配は全く無く、平康を過ぎ昨日折り返した駅も通り過ぎて、平康からはるか北の元山に十五時ごろに停車した。これ以上北に行つては大変だとの判断から、全員強行下車した。駅前の広場に皆を待機させておいて、父と数人の代表がソ連軍の本部に交渉に行つた。その間に山田先生は考えておられたらしく、ここからさらに北の興南におられる両親と家族のもとに行つてみたいと言われ、私たち周りの人たちに丁寧と話されて、交渉に行つた方たちにくれぐれも宜しく伝えて欲しいと言われて、駅に向かわれた。

その後、二時間ほど経過したように思うが、終戦まで日本人が経営していた、元山府緑町に数棟あった遊郭に収容された。私たちの落ち着いた所は、緑町二十五番地、新盛楼の二階八畳ぐらゐの畳の部屋であつた。

ここに抑留されている間に、大人の男は元山港の荷役に働きに行つた。私たち子供は苗木を育て

ている所とか、漬物工場へ働きに行つた。漬物工場では、そこで働いている人たちと一緒に昼はご飯を食べさせてもらった。ソ連人も大勢働いていたこともあつてか、毎回ご飯が油炒め、副食がキャベツが多くて、これがまた油炒め、漬物がまたキャベツ、これは塩漬け、使っている油は植物油、菜種油が多かつた。漬物工場での昼ご飯は有り難かつた。そしておいしかつた。

ソ連軍が分けてくれる食糧は雑穀ばかり、玉蜀黍、高粱、稗、粟、しかも丸粒、よく煮ても大人でもなかなか噛みこめないから、小さな子供は食べられるわけが無く、栄養失調から抵抗力が低下して、ポツリポツリと亡くなっていく子供が増えてきた。私たちと同じ部屋に生活していた、亦造叔父さんの長男で二歳になつたばかりの昭ちゃん、十月二日に亡くなつた。時代に恵まれなかつた子供たちだと思ふと、かわいそうで涙が出た。

十二 強制連行

夜の七時ごろになると、突然保安隊員が入つて

来て、強制連行が何回かあった。道路上に数珠つなぎにして、無理やり連行して行ったのだった。いわゆるシベリヤ送りであったのではなからうか。下からそれらしき声が聞こえてくると、大急ぎで男の人たちは地下室に逃げ込んで隠れた。父も、一歳の静子をおんぶして逃げ込んでいた。第四部落の坂野さんは、二年前の昭和十八年に奥さんを亡くされて、その後召集を受けて、五人の子供たちは周りの人たちに預けられるという大変な苦勞を体験されたが、幸い元気で部落に戻って来ることができた。その坂野さんに、保安隊員が銃を付き付けて強制連行しようとした。小学生だった文子ちゃんと郁子ちゃんの二人の子が、お父さんの両足にしがみ付いて大声で泣きわめいた。保安隊員もこれではと思ったのか、諦めて引き下がった。二人の我が子に助けられて、シベリア送りを免れることができた。幸い元山で収容されている間に、私たちの団体からは強制連行された人は無かった。

十三 虱の大発生と便所の氾濫

長い間、同じ衣服を着て洗濯もできず、風呂にも入れない状態が続くと、自然に虱が大発生する。子供のころ、蚤は知っていたし、普通の日常生活をしていても発生することはあった。虱も女の子の髪の毛に、ときどき発生することはあったが、衣服に発生することは無かった。髪の毛につく虱は黒い色で、体につく虱は白かった。この白い親虱が、衣服の縫い目の至る所に白い小さな一ミリメートルぐらいの卵を所狭しとびっしり産み付けている。そして所々に親虱が、のっそりのっそり動いている。蚤は自分の体の何百倍も飛べるが虱は飛べない。この虱の親子を一網打尽にするには、熱湯に着ている物を放り込んで煮殺すしか方法は無い。しかしどこかに生き残っていると、間もなく元通りに増えてしまう。

元山で収容されている間に大勢の人が使っているが、だれもくみ取らないから、当然のことながら便所の「うんこ」がくみ取り口から大量に氾濫する。そこが幸いに平地であったので、

父はどこからか鋤を借りてきて一人で処理していた。鋤で溝を掘って、そこへ流し込むようにして、次の溝を掘りながら掘り上げた土を覆って行く。肥料をすき返しながら畑を耕していく方法をとったのです。しかし、そんな簡単なものではなく、だれも汚いことに手を出さなかった。今さらながら、あのときの父の行動力に頭の下がる思いがしてならない。

十四 元山から再び平康へ

五十日ほどの元山での生活が経過したころ、ソ連軍が「お前たちは、元居た所に帰れ」と言い出した。情報によると、どうやら食糧事情が原因らしい。

十月末、全員貨車で平康に送られたが、どんな事情かは分からなかったが、一つ手前の福溪駅で全員下ろされた。仕方無く駅前で一晩野宿をした。朝見ると、全身に真っ白く霜が降りていた。福溪から平康までは歩いた。一番近かった二部落にたどり着いてほっとしたが、ほとんどの家はソ連軍

の兵隊の宿舎になっていた。女の人や子供たちもいた。二部落から一番近い六部落も同じ状況だったが、なんとソ連兵たちは我が物顔で生活していた。

二部落から東に弥栄神社を過ぎて間もなく、組合事務所と住まいが一緒になっている我が家の様子を恐る恐る見に行ったら、どうやらソ連軍の幹部の宿舎になっていたらしい。敗戦国民の惨めさをつくづくと感じて、二部落に戻った。数軒空家になっていた所で、着の身着のまま雑魚寝をすることにした。ソ連兵が、日中時々理由もなく銃を空に向けて、実弾を発砲していた。多分、私たちに對する脅しであつたらうと思う。

十五 ペチカ、ロスケ

ここに来て二日目ごろ、一人のソ連兵が父を連れに来た。言葉は通じなくても、強制連行でないことは分かった。夕方、父は無事帰って来た。話によると、ソ連兵は自分でペチカを構築するのに助手が欲しかったらしい。話を聞いて、母も胸を

撫で下ろした。翌日、また同じソ連兵が父を探しに来て連れて行った。私たちはそのソ連兵を「ペチカ、ロスケ」と命名した。父は、常に「助手をする者は使う側の手足のように気の利いた手伝い方をしなければならぬのだ」と私たちを指導していた。そんな父の手伝い方が気に入られたのか、当時の朝鮮紙幣をもらって来た。貴重なお金で有り難かった。三日目も迎えに来た。その日は父が予定があつて、代わりに僕のすぐ下の弟明雄と、同級生の遠田君の二人が手伝いに行った。後から聞いた話によると、二部落の西にあつた結核療養所のお医者さんの家だつた所にソ連軍の将校が入つていて、そこに部下の兵隊がペチカを構築していたらしい。弟明雄も遠田君もそのとき六年生で真面目であつたから、一生懸命手伝い「ペチカ、ロスケ」は大助かりだつたようでした。昼にはソ連軍の食堂に連れて行つてくれて、黒パンなどいろいろと腹いっぱい食べさせてくれて、帰りにはお金もくれたと喜んでいた。人の良いソ連兵もい

たのだった。

そのころ、夜になると雑魚寝をしている私たちの所に、毎晩のように若いソ連兵が夜這いに来るので、その対応に大変だつた。大人の男の人たちが出入り口の方に足を向けて寝るようにした。ソ連兵はその足を引っ張るので、来たことが分かつた。そして、予め準備しておいたブリキの缶を、棒切れでガンガン叩いて騒ぎ立てる。女の人は、既に髪を切つて丸坊主、顔には鍋墨を塗りたくつて防衛していたが、そんなことはお構いなしで小学生の女の子にまで、胸に手を入れていた。周囲いっばいに聞こえるような騒ぎをするので、ソ連軍の憲兵が来て取り締まるので、若い兵隊は諦めて退散する。そんなことの繰り返し毎夜であつた。

ペチカ構築の手伝いが終わつて、一日か二日過ぎた日の日中、弟の明雄が友達と遊んでいたら、三人のソ連兵が日本の女の人を追いかけて回っていた。その中の一人が、なんと「ペチカ、ロスケ」

だった。人の良さそうな彼は、小学校六年生の男の子になだめられて、赤ら顔を一層赤くして仲間と退散して行ったとのこと。「あのときは、俺が話をつけたんだ」と、明雄は後から得意気に言っていた。

組合事務所の金庫の左側に、床板と同じ板で一メートル四方ぐらいの蓋があつて、その蓋を持ち上げて五段ほど階段を下ると、普通の人が立って歩けるぐらいの地下室があつた。二カ月前の八月三十一日、ここから退去するとき再びここへ舞い戻つて来るとは思わなかつたが、父は三個ほどの柳行李に外出用の背広や礼服、着物類を詰めて放り込んでおいた。明雄が父に代わつてペチカの構築を手伝いに行った日、父と母と僕と弟行彦と四人で組合事務所に行った。私たちを入口に待たせておいて、父が交渉に行った。外にいたソ連兵と話している様子を、三人で遠くから見守つた。間もなく事情が通じたらしく、父はソ連兵と一緒に中に入つて行つた。十分ほどしただろうか、父

が柳行李を一個持つて、二人のソ連兵が一個ずつ持つて庭に出て来て、三個共その場に置いた。

父が無事に出て来て良かった。私たち三人は、十メートルぐらい離れた所から見守つていた。父に柳行李を三個共開けさせた兵隊は、階級が上のように偉そうな感じがした。取り出しながら、気に入つただけ持つて中に入つた。父が急いで行李の蓋を閉めているうちに、その下の階級らしいのが三人ぐらい出て来て、同じように拾つて持つて行つた。三回にわたつて入れ代わり立ち代わり持つて行つた。遠くからドラマを見ているようで面白かつた。最初から諦めていたものだから。それにしても、最後に純毛のモーニングのズボンが一つ残つた。どうやらソ連人には短かつたようで、それを大事に日本まで持つて来た。母の着物も入つていたのに、彼らは記念に持つて行つたんだらう。二カ月前まで住んでいた家も、地下室に置いていった私物の着物も当然のように取り上げられて、文句も言えずに親子四人、二部落の雑魚寝を

している所に帰った。

十六 三十八度線越え

元山から平康に送り返された後は、それぞれが自主的に自分の判断で行動するようにした。

十一月も上旬になると、朝鮮平康では雪が降り積もった。一部の人たちは終戦まで懇意にしていた朝鮮人の家に行つて、朝鮮服をもらつて着替えて早々と南に向かった。そのうちに、全員が次々に二回目の平康から退去を行った。

私たちが最後になつたが、一緒に歩き始めたのが遠田さん、坂野義雄さんそして坂野吉六さんの一家だった。最初は四家族で一緒に歩いたが、途中から話し合いの結果、目立たないように各家族ごとで別々に行動することにした。このときは、日中歩いて夜は現地人の所に泊めてもらった。最初の逃避行より小グループなので、はるかに早く行動することができた。ある集落で道を尋ねたら、流暢な日本語で親切に教えてくれた。しかも、名古屋に何年か住んでいたことがあるということ

話してくれた。何となく親しさを感じて、お礼を言つてそこを出発した。

一生懸命歩いたが、周囲は一面の雪だ、けれども歩いている道は幸い土の面があった。僕がおんぶしていた三歳の妹みゆきは、足が冷たくなり、時々「あんよがべーたいよ！」と言つてぐずつた。既に太陽は西に傾いていた。気が付いたとき、後から三人の朝鮮人らしき男の人が同じペースでついてきた。全然人通りの無い所で僕たちを追い越して行つたと思つたら、立ち止まつて行く手をさえぎつて、「金を出せ」と言う。仕方が無いから、父がポケットから出して全部渡した。お金は分散して入れてあるから、身ぐるみ剥がされなければ無一文になることは無かった。こいつらは追い剥ぎだった。乱暴な態度ではなかつたので、それほど緊張感はなかつた。ところがなんと、取り上げた金を全額返してよこした。その後、三人は僕たちの先になつて同じ方向に歩いて行つた。間もなくまた集落があつて、十人ほどの人たちが道路の

そばの家の前で雑談をしていた。そこを通り過ぎようとしたら呼び止められて、「あの先に行く三人は悪い奴らなんだ。もしお金でも取られたら、取り返してやる」と言った。「実は取られたけども全部返してよこした」と言ったら、うなずいていた。「これから三十八度線を越えて南に行きたいんだ」と話したら、「それなら案内人を世話してやる」と言うので、ここまで来たからには今度こそ無事に三十八度線を越えて南に行かなければならないので、地理に詳しい現地の人に案内してもらったことにした。

暗くなつてから夜通し歩いたが、途中だれにも会わなかった。山道から出て田圃道を歩いているとき、五十メートルぐらい右の方で、ソ連兵と朝鮮人の一団が歌って騒いでいるような所を通ったが、案内人も黙って黙々と先導していた。夜道を歩くのには、月明かりがちょうど良い明るさだった。道らしい道は通らないで、抜け道ばかり通っているような気がした。案内人を信用して一生懸

命歩いた。午前三時か四時ごろに、危なっかしい丸木橋がかかっている川を用心して渡っていたら、明雄が滑り落ちて吃驚した。幸いそこは水の深さが膝ぐらいで、橋下、水面まで一メートルほどだったから良かった。着替えている余裕など無いから、濡れたままで歩かせた。

この川がイムジン川だということは、後で知った。現地の様子に詳しい案内人のお陰で、無事に三十八度線を越えることができた。案内人と別れてからもなおしばらく歩いていたら、アメリカ軍のジープが通りかかって乗せてくれた。しかもチヨコレートをくれたが、僕はチヨコレートを生まれて始めて食べた。

十七 京城での生活

当時の京城の二駅ぐらい西の板門店の駅まで送ってもらった。このアメリカ兵の善意は本当に嬉しかった。朝八時ごろ、駅の近くの食堂で食べた米のご飯が格別においしかった。

貨車で京城に行つて、京城の南山にあった朝鮮

神宮に到着したが、既に夕方まで暗くなっていた。百畳敷きぐらいで、紫房の垂れ下がった奉賛殿に落ち着いた。世が世であつたら、簡単に私たちの入れる所ではないのと思った。平康産業組合の細谷さん、加藤さんほか二、三家族の人たちがいた。ここにいる間に、世話会の方々に大変お世話になった。行彦は朝鮮神宮の神主さんのお宅に預かってもらい、引揚げのときまで大変お世話になった。姉は平康の結核療養所の婦長さんだった方の知り合いの家に四、五日泊まり込みで引揚準備の手伝いに行った。

十二月に母が病気になる、京城の罹災民救済病院に入院して、姉が看病することになった。高熱が続くそばで、一緒にいた三歳の妹みゆきが十二月十八日に亡くなった。この子も時代に恵まれなかったと思ひ、かわいそうだった。父と姉と明雄と僕で火葬場で火葬にした。

奉賛殿で年を越し、二十一年の正月を迎えて間もなく、奉賛殿で父が倒れ、続いて弟の明雄もそ

ばにふして身動きができなくなった。父は一週間ぐらいほとんど食えることができなかった。火鉢の消し炭の火のそばに井を置いて、お湯を沸かして飲ませた。父は脇に寝ている明雄に、「食べないと死ぬぞ！」と繰り返していった。僕は、奉賛殿と病院との間を行ったり来たりした。母の入院している病院の食堂で先生方と一緒に晩御飯を食べていたら、主治医の山下先生に、「お父さんはどうしたんだ？」と聞かれた、僕は母が重態なんだと察した。山下先生には父が奉賛殿で病臥中のことは話していなかったが、翌日明雄を何とか起こして二人で父を両側から支えて病院に行った。先生はうなずいてくれた。

姉は炭を一俵買って来て、七輪を使って父と一緒に母の大好きなうどんを一生懸命作って食べさせた。重態の母のそばで一番下の一歳の静子が、風邪が元で体力の低下から肺炎になり、一月十六日息を引き取った。時代に恵まれなくて短い生涯を終わった。かわいそうだった。京城の火葬場で

火葬した。

ここ京城で二人の幼い命を葬ったが、父も母も死線を越えて何とか歩けるようになった。平康産業組合の人たちは、この引揚げによって多くの尊い命を失ったが、ほとんどの人が生まれ故郷にたどり着くことができた。

十八 いよいよ日本へ向かう

昭和二十一年一月末、私たちが最後になって有蓋の貨車で京城を出発して、釜山に向かった。途中、貨車の中で一緒になった引揚者の人からお裾分けを頂いた。残念ながら名前が分からないのですが、朝鮮の人たちがお米の粉で上手に作る落雁のような食べ物が、とてもおいしかったことを覚えてい

釜山からは貨物船の船底に入った。夜中に玄界灘の途中で、時間調整とかいうことで三、四時間停泊した。そのときに船員が疑似餌を使って糸を斜めに上下して、上手にイカを釣っていた。僕たちも、釣りたてのイカを生で食べた。これがまた

おいしかった。

下関に機雷の心配があるとかで、博多に上陸した。岸壁で整列して、片っ端からDDTの粉末を手押しポンプで頭从天辺から散布されて、さらに襟首にポンプの先を挿し込んで、体の前後に吹き込まれた。

しばらくぶりに客車に乗って、窓から空襲で焼野原になった本土の惨状を眺めながら、愛知県の豊橋に着いて渥美半島に行く電車に乗り換え、一時間ほどで終点田原に着いた。

そのままの姿で、田原の病院遺家族で入院している亦造叔父さんを見舞った。叔父さんは元山で二歳の長男、昭ちゃんを亡くして、年内に引き揚げることができたけれども、長女の七歳になった幸子ちゃんを十二月二十六日に亡くされたこのことで、皆で泣いた。幸子ちゃんはどうやく内地にたどり着いたのに、さぞ無念だったろう。

母の妹の志津子叔母さんが、牛車で病院まで迎えに来た。母の両親も元気で、皆に喜んでもらえ

た。母の弟の源吾叔父さんがビルマで戦死され、母の実家では大事な後継ぎを失っていた。その日のうちに父の実家にもあいさつに行つて、皆に喜んでもらった。

幸い母の実家から一キロメートルぐらいの所に、六反歩ほどの畑が屋敷の内にある六畳二間の家が空家になっていたので、当面畑と一緒に借用して生活することにした。

僕と明雄と行彦は、田原町の国民学校に入校の手続きをして、通学を始めた。長い間の空白があったので、当初勉強が皆目分からなかった。しかし、そんなことは問題ではなかった。毎日の生活や、命を脅かされることは無くなった。

日本国内では祖国のために戦つて、幸い生還できた人、海外に移住して夢半ばにして故郷に引き揚げなければならなくなった人たちなどを迎えて、国中が食糧難に陥つた。僕たちも、父や母の実家には大変お世話になった。

十九 再び開拓生活

さし当たつての生活が落ち着いた三月始め、父は茨城県内原の加藤完治先生に、引揚げの報告に行つた。「残念なことに多くの犠牲者は出ましたが、平康産業組合員は全員それぞれの故郷に引き揚げました。私は、これから愛知県で家族六人の生活の確立に努力したいと思います」と報告を済ませたら、加藤先生から「君に見せたい所があるから」と言われて、先生の案内でトラックで水戸から国道五十一号線を南下して、鹿島砂丘地帯、東の鹿島灘に約五キロメートル、東南千葉県の銚子に約三十キロメートル、南西の利根川に約二十キロメートルぐらいの場所で、実生の松が所々自生して、栄養失調のような茅などがまばらに生えている砂地に案内された。ここは、終戦までの中央航空研究所跡地。「ここを開墾して食糧増産に努力しなさい」との加藤先生の指示で、父は即座にここ砂丘地での再出発を決心した。利根川を渡船で小見川に出て、総武成田線で東京、東海道線で渥美半島に帰つた。当時は、蒸気機関車で朝出

掛けて晩になるコースだった。朝鮮と一緒にいった鉄一叔父さんと亦造叔父さんに、父は「俺はこれから、こういう所へ行行ってやろうと思うが、お前たちはどうする」と話したら、鉄一叔父さんは「俺はここで生活する」と言い、亦造叔父さんは「兄貴の行く所ならどこへでも行く」と言った。

昭和二十一年四月一日、一緒に第一陣として入植した。その後、外地からの引揚者、復員軍人、地元の人が入植して、五十戸の大野原開拓組合が発足した。同時に、北隣の高松航空跡地に高松開拓、南隣の宝山の若松爆撃実験場跡地に若松開拓が発足して、入植者は自活と食糧増産に精を出した。

当時の開拓は、機械も蓄力も無かったから、開墾は開墾鋤で一鋤一鋤耕した。僕たちも学校から帰ると勉強どころではなく、明るいうちは暗くなるまで開拓鋤で開拓した。石ころも無く砂地だったから、鋤の通りは良かった。

父の着想で、簡易開墾といって九十センチメー

トル幅で両側から折り返して、間の土を上に乗せて畦を造る、表面にあった草は下になって堆肥になる、高畦の上に甘藷の苗を植えて、十月甘藷を掘って畦間の低い所に肥料を入れて麦を播く、甘藷と麦の二毛作。薩摩芋は蒸かして食べ、麦は粉にしてうどんやパンにして食べた。ビタミンは野菜を作って食べた。寒い朝鮮と違って、冬の野菜の確保が楽だった。蛋白質は、イナゴをよく食べた。今は殺虫剤を使うのでいなくなったが、当時は田圃の畔の草にたくさん捕まえられた。母はこのイナゴ捕りが上手だった。熱湯に放り込むと赤くなつて、茹に干して保存食にした。

昭和二十五年ごろから、発動機とポンプで地下水をくみ上げて陸稲栽培を始めて、米が自給できるようになった。水稻に比べると味は落ちるが、申し分無かった。

昭和二十一年後半になって有畜農業が推奨され、二、三頭飼いはじめた乳牛が次第に増えて、遂に酪

農專業経営になった。

二十 結び

昭和三十六年、偶然に満州から引き揚げた女房と縁があつて結婚して、男の子を四人授かった。

日本の農業も機械化されて、人力に頼る時代は終わった。健康な肉体と健全な精神を培つてやろうと始めさせた剣道が、四人で合わせて二十段の目標が、長男の嫁や孫を合わせると三十段を突破した。

長男信行が大学卒業後、後継者となつて、我が家も三代目七十八年の歴史を刻んだ。

母を平成三（一九九一）年に八十四歳で、父を平成六年に九十二歳で見送つた。日本の国民も食べ過ぎで糖尿病が増えたなんて、とんでもない時代がきたものだ。僕が七十五歳、女房が七十一歳、まあまあ元気です。これからは健康に気を付けて、平和に感謝しながら生きていきたいと思ひます。

鳥になつて日本に帰りたい

千葉県 水野 幸子

一 八月九日の羅津

「ウー ウー ウー……」昭和二十（一九四五）年八月九日午前零時五分、途切れ途切れにけたたましく鳴るサイレンの音、初めて羅津に空襲警報が発令された。六月ごろから羅津湾に機雷投下のため、夜半になるとアメリカの爆撃機が姿を見せ始め、三分間連続吹鳴の警戒警報を知らせるサイレンが鳴り響いていた。飛来は次第に間隔を縮め、八月には夜ごととなつていたが、突然の空襲警報の発令は、羅津に住む人々を震撼させたのであつた。驚いた私の家族は、慌てて防空壕に飛び込み、練習を重ねていた通りに目と耳を指で押さえ、背を丸くしてかがみ込んだ。港の方角では「ドカーン、ドカーン」と轟音があがっていた。また、高射砲から発射される砲弾の炸裂音はすさまじく、